生命（いのち）のにぎわい調査団

生命（いのち）のにぎわい通信

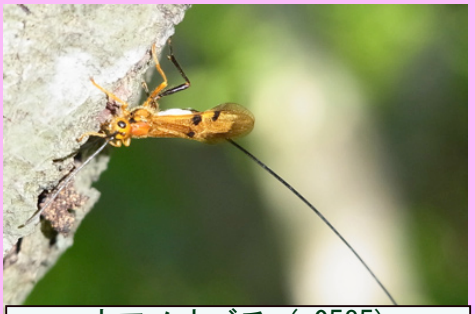
第 29 号：発行　平成26年（2014年）1月

発行：千葉県環境生活部自然保護課
千葉県生物多様性センター
〒260-8682　千葉市中央区青葉町955-2
（千葉県立中央博物館内）
TEL 043-265-3601　FAX 043-265-3615
URL http://www.bdcchiba.jp/monitor/
E-mail monitor@bdcchiba.jp

平成 26 年／ 2014 年の十二支「午うま」馬／ウマが名前につく生きもの

今年の十二支は「午うま、馬」です。馬は古くから人間との関わりがとても深く、家畜や労働力として役に立ってきた生きものです。日本列島に馬の祖先がいたかは謎とされ、生き残っている日本在来の和種馬（木曽馬など８種）は、古墳時代にアジア大陸から朝鮮半島を経由して、日本へ持ち込まれたモンゴル馬の子孫との説が有力です。房総半島では古くから馬が放牧されており､江戸時代には幕府直轄の牧（まき：小金牧、佐倉牧、嶺岡牧）で軍馬の育成が行われていました。明治以降は、外国産馬サラブレッド種等の軽種馬が導入されて、北総台地の牧場は競走馬の産地となり、馬のセリ市が開催されてきました。現代の馬の牧場では、競走馬の育成や調教管理並びに馬とのふれあいのための乗馬クラブ等を行っています。

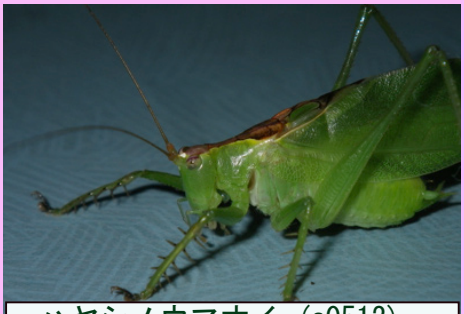
以下の写真の生きものは、馬（ウマ）が名前につきます。他にも魚のウマヅラハギ（和名は馬面剝）やタツノオトシゴの仲間オオウミウマ（大海馬）などは、顔が面長で馬に似ていることが名前の由来です。



ウマノオバチ（a0585）

コマユバチ科　　和名は馬尾蜂

他の虫の幼虫に卵を産みつける寄生ハチの一種で、産卵管が馬の尾の様にとても長い。クヌギの朽ち木の中にいるシロスジカミキリの幼虫へ産卵管を差込んで卵を産みつける。



ハヤシノウマオイ（a0512）

キリギリス科　　和名は林馬追

スイーーッチョンの鳴き声（翅をすり合わす音）が、馬子が馬を追う声に似ていることに由来する。他の虫を捕食する。鳴き声の違いから２種（音を長く伸ばす、ハヤシノウマオイ､）（短く鳴く、ハタケノウマオイ）に分類された。

シマアメンボ　（a0034）

アメンボ科　　和名は縞水馬

長い脚で水面を滑走し、水面に落ちた他の虫に口吻を突き刺し消化液を注入して体液を吸う水棲カメムシの一種である。和名の「アメンボ」は捕まえると「飴」の様な甘い匂いを発することからついた。

ウマノスズクサ（a0285）

ウマノスズクサ科　和名は馬鈴草

多年生のつる植物であり、花や果実の形が馬の鈴に似ているといわれる。蝶のジャコウアゲハの幼虫の食草である。千葉県では草本の「ウマノスズクサ」と木本の「オオバウマノスズクサ」がある。

クラズミウマ（a0826）

カマドウマ科　　和名は蔵住馬

洞窟や樹の穴または土蔵・物置など暗くて湿度の高い場所で生息している。成虫も翅がなく、背中が丸く馬に似ているといわれ、長い後脚で跳ぶ。竈馬（カマドウマ）の仲間は、形態では同定が難しいとされる。雑食性であり何でも食べる。

コマドリ（a0512）

ツグミ科　和名は駒鳥

ヒーンカラカラカラの鳴き声が馬・駒の嘶き（いななき）に似ているのが名前の由来とされる。「オオルリ」「ウグイス」とともに､さえずりの美しい「日本三鳴鳥」と呼ばれる。千葉県内では、春と秋の渡りの途中に通過する際に観察できる。

最新の生物多様性に関する情報、各種講習会の情報　は、当センターと調査団のホームページをご覧ください
「調査団」http://www.bdcchiba.jp/monitor/index.html と「生物多様性センター」http://www.bdcchiba.jp/

平成２５年度第２回調査団現地研修会 in『手賀沼親水公園』水の館と遊歩道。我孫子市

平成２５年月１２月７日（土）に、調査団現地研修会を、千葉県手賀沼親水広場・水の館において、“手賀沼の自然と生きものを知ろう”をテーマとして開催しました。参加者は、団員と事務局合わせて３０名でした。

かつては自然が豊かであった手賀沼が、周辺の開発等の環境変化により水質が悪化して、沼の生態系が変遷してきたことを、実際の生きものの観察等を通して、団員とともに考える機会としました。

午前中の前半は手賀沼親水広場にある水の館で「手賀沼の歴史と人のかかわり」「手賀沼の生きものの今と昔」沼の水質と生態系（魚類､淡水藻類）の変化､沼の干拓の歴史や周辺の開発などの展示について解説を受けました。絶滅が危惧される水生植物（抽水、浮葉、沈水）の保全再生水槽を観察し、その後、湖畔へ出て観察会用のカゴワナを回収し、獲れた魚やエビを観察しました。後半は遊歩道を東に向かって水鳥や昆虫、クモ、植物などを観察しました。

沼の浅い水辺では、タイリクバラタナゴ（要注意外来生物）の稚魚が、まるでメダカの群れのように多く生息していました。

研修会終了後は、有志で我孫子市鳥の博物館を見学しました。博物館の花壇にはウマノスズクサがあり、この植物を食草とするジャコウアゲハのサナギを発見しました。

○「参加者アンケートから」

沼の水質や生態系の変遷を専門家に解説してもらい、沼の地形や生態系についてよく知ることができた。

今まで知っていた以上に手賀沼の水質や生物・生態系が変化してきたことがわかった。カモが食性の違い／餌の増減で生息数が減少していること、外来種の植物や鳥や魚類が増えていることなど、実際に採って観察して、変化が理解できた。

水生植物が絶滅してしまった水質の悪化等の原因が、人間の活動・開発によることをあらためて知った。

実際に漁具や手網で魚類やエビを観察できたことが良かった。

○「水の館展示水槽」で観察した生きもの

メダカ、アメリカザリガニ、ツチフキ、カマツカ、ミシシッピアカミミガメ、スッポン、ヘイケボタル、ニホンウナギ、タウナギ、コイ、ゲンゴロウブナ、ニホンナマズ、カムルチー、ウグイ、オイカワ、ニゴイ、ヤリタナゴ、ワタカ、ギンブナ、アカハライモリ、トウキョウサンショウウオ、サワガニ、ニホンイシガメ、クサガメ、モクズガニ、ドジョウ、モツゴ、タモロコ、イトモロコ、タイリクバラタナゴ

トウキョウサンショウウオ（展示）

○「湖畔の遊歩道」で観察した生きもの

魚類：モツゴ、タモロコ、ツチフキ、ヌマチチブ、テナガエビ
　　タイリクバラタナゴ、ドジョウ、メダカ
植物：トウネズミモチ、シロダモ、ムクノキ、オオフサモ
クモ：ジョロウグモ、ビジョオニグモ、ナカムラオニグモ
昆虫：ツマジロエダシャク、モンシロチョウ、モンキチョウ、
　　ヤマトシジミ
鳥類：カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ダイサギ、
　　コサギ、アオサギ、コブハクチョウ、カルガモ、コガモ、
　　オナガガモ、ミサゴ、トビ、キジ、バン、オオバン、
　　セグロカモメ、ユリカモメ、キジバト、カワセミ
　　ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、ウグイス、
　　ホオジロ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシブトガラス

オオジュリン

ツマジロエダシャク

カンムリカイツブリ

オオバン（脚の指が幅広です）

「生命のにぎわい調査フォーラム」 ＆ 「写真コンテスト」 開催のお知らせ

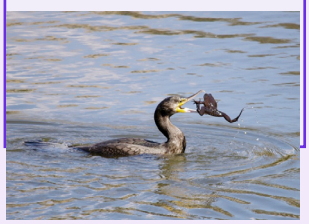
生物多様性に関する情報提供（人と生きものとの関わりや調査団報告）と団員からの事例紹介で相互に情報交換を交流を行う「調査フォーラム」を開催します。

日時　平成 26 年 3 月 15 日（土曜日）午後 1 時から午後４時まで
場所　千葉県立中央博物館の講堂

調査団員限定の「写真コンテスト」の応募締め切りは２月２８日です。
＊調査フォーラム当日に、参加者の投票によって賞が決定します。

平成 24 年度コンテスト最優秀賞
「絶対に、離さないからね。」
1 匹のニホンアカガエルを取り合う 2 匹のヤマカガシ　撮影 a0195

平成 24 年度コンテスト優秀賞
「鵜呑み」
特定外来生物ウシガエルを捕食するカワウの若鳥　撮影 a0285



＜これからの季節に観察できる生きもの＞

◎（a0***）は写真撮影者の調査団員番号

○調査対象種：カワセミ、ミヤコドリ、ウメの開花、ミノムシ類、

○調査対象種以外（種の同定が難しいため、報告には写真の添付が必要です）
＊渡り鳥のカモ類、猛禽類　など　＊越冬している昆虫：タテハチョウ類　など
＊希少生物（生息・生育数が減少している生物）や外来生物（特定外来生物・要注意外来生物）の報告も受けています。